



Title	大学キャンパスにおける共用空間の評価と計画に関する研究
Author(s)	吉岡, 聡司
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （吉岡 聡 司）	
論文題名	大学キャンパスにおける共用空間の評価と計画に関する研究
論文内容の要旨 近年は国公立私立を問わず優秀な学生獲得のためのキャンパスのイメージ戦略として、福利厚生施設や課外活動施設の充実が図られるようになり、また教育や研究活動を充実させるために学生の居場所としての、あるいは教職員や学外の人々も含めた交流に資するための「共用空間（コモンズ）」の充実が図られるようになった。 いわゆる「コモンズ」として図書館等に設置された空間でなくとも、食堂等福利厚生施設はそのような性格をもち、屋外の広場等の空間も共用空間としての性格をもつ。あるいは課外活動施設や講義室も共用空間としての性格をもつ場合がある。 広場等オープンスペースに着目した研究や、食堂等福利厚生施設あるいは図書館等をビルディングタイプの捉えた研究は、少なからず存在する。しかしキャンパスの内外をつなぐ街路や広場を含めたアプローチ空間、ならびに建物の内外をつなぐテラスは、キャンパスや建物の内外をつなぐという共用空間の一つの重要な本質を有すると考えることができるが、こうした空間に着目した研究はない。 本研究はこうした観点から、キャンパスにおける屋外共用空間の代表としてのオープンスペースの居心地良さと満足度、広場も含んだキャンパスのアプローチ空間整備のプロセス、および屋内の共用空間の代表としての食堂等やその屋内外をつなぐテラス席の使われ方、ならびにテラス席の街路との位置関係を示す指標の提案と使われ方との関係性、これらを検討して共用空間の評価と計画に資する要点を得ることを目的とする。 本論文は以下の8章から構成されている。 1章では序論として研究の目的を示し、その背景となる大学キャンパスの計画をとりまく社会的状況や今日的コンセプトを示したうえで、さらに関連する共用空間、福利厚生施設や屋外の広場等に関する研究との関係を述べた。 2章「大阪大学のキャンパスとその共用空間に関連する取り組み」では、国立の大規模総合大学である大阪大学の主要3キャンパスに関する法人化以降のこれまでの主要な取り組み、ならびに福利厚生施設と課外活動施設ほか共用空間の整備に関する取り組みについての全体像や今後の課題を示して、キャンパスの共用空間に求められていることを浮き彫りにした。 3章「オープンスペースの居心地良さと満足度の検討」では、屋外の共用空間としてのオープンスペースの使われ方の分析として、大阪大学豊中キャンパスの主要なオープンスペースの単独利用者に対する調査からの居心地良さと満足度、その他の感覚との関係を分析し、またグループで利用する場合との違い等について分析した。 4章「アプローチ空間における多様な主体との協働による整備プロセス」では、3か所のアプローチ空間の整備が行われた大阪大学豊中キャンパスを例にとり、各計画のプロセスと主要なステークホルダーの相関を分析することで、今後の計画に資する達成要因や対話プロセスによる効果を明らかにした。 5章「食堂等の設置状況と利用の全体像」では、国内の18の大規模総合大学の食堂・売店等設置状況を調べ、うち大阪大学の学生生活調査の結果から食堂の選好状況を把握したうえで、さらに3大学の食堂の行動観察調査による分析を行った。 6章「食堂等テラス席の利用実態とよく使われるテラス席の分析」では、文献調査から2011年以降のテラス席の整備事例を分析したうえで、近畿圏における3大学のテラス席について行動観察調査の結果の数量化分析から、どのような条件にあるテラス席が好んで利用されるのかを明らかにした。 7章「テラス席が街路に面する程度を表す指標の検討」では、3大学7カ所のテラスの写真を用いた評価グリッド法によって建築学生の意識の中の評価構造を検討したうえでテラスと街路の関係性を示すモデルFIPL (Facing Index on a Point to a Line) の提案を行い、さらに終日の行動観察調査結果を用いて、提案したFIPL指標の有効性検討を行った。 8章「研究の総括」では、オープンスペースの居心地や満足度には「開けた感じ」が説明変数として採用されうること【3章】、アプローチ空間整備については多様なステークホルダーとの対話プロセスが敷地を跨いだ空間整備に効果を発揮したこと【4章】、国内大規模総合大学の食堂等の1㎡あたり学生数や多様な整備手法の存在を明らかにしたこと【5章】、テラスの開放感や自然、あるいは日陰等が快適性の要素となること【6章】、テラスと街路の関係を示す単純な指標 (FIPL) が14:00～16:00の食事行動において有効性を示し得ること【7章】、これらを各章の主な結論として示した上で、総括としてこれらのキャンパス内外をつなぐ空間ならびに建物内外をつなぐ空間の計画に資する要点を整理した。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (吉 岡 聡 司)		
論文審査担当者	(職)	氏 名
	主 査 教 授	横田 隆司
	副 査 教 授	木多 道宏
	副 査 教 授	阿部 浩和

論文審査の結果の要旨

近年は国公立私立を問わず優秀な学生獲得のためのキャンパスのイメージ戦略として、福利厚生施設や課外活動施設の充実が図られるようになり、また教育や研究活動を充実させるために学生の居場所としての、あるいは教職員や学外の人々も含めた交流に資するための「共用空間(コモンズ)」の充実が図られるようになってきている。

いわゆる「コモンズ」として図書館等に設置された空間でなくとも、食堂等福利厚生施設はそのような性格をもち、屋外の広場等の空間も共用空間としての性格をもつ。あるいは課外活動施設や講義室も共用空間としての性格をもつ場合がある。

広場等オープンスペースに着目した研究や、食堂等福利厚生施設あるいは図書館等をビルディングタイプの捉えた研究は、少なからず存在する。しかしキャンパスの内外をつなぐ街路や広場を含めたアプローチ空間、ならびに建物の内外をつなぐテラスは、キャンパスや建物の内外をつなぐという共用空間の一つの重要な本質を有すると考えることができるが、こうした空間に着目した研究はない。

本研究はこうした観点から、キャンパスにおける屋外共用空間の代表としてのオープンスペースの居心地良さと満足度、広場も含んだキャンパスのアプローチ空間整備のプロセス、および屋内の共用空間の代表としての食堂等やその屋内外をつなぐテラス席の使われ方、ならびにテラス席の街路との位置関係を示す指標の提案と使われ方との関係性、これらを検討して共用空間の評価と計画に資する要点を得ることを目的としている。

本論文は以下の 8 章から構成されている。

1 章では序論として研究の目的を示し、その背景となる大学キャンパスの計画をとりまく社会的状況や今日的コンセプトを示したうえで、さらに関連する共用空間、福利厚生施設や屋外の広場等に関する研究との関係を述べている。

2 章「大阪大学のキャンパスとその共用空間に関連する取り組み」では、国立の大規模総合大学である大阪大学の主要 3 キャンパスに関する法人化以降のこれまでの主要な取り組み、ならびに福利厚生施設と課外活動施設ほか共用空間の整備に関する取り組みについての全体像や今後の課題を示して、キャンパスの共用空間に求められていることを浮き彫りにしている。

3 章「オープンスペースの居心地良さと満足度の検討」では、屋外の共用空間としてのオープンスペースの使われ方の分析として、大阪大学豊中キャンパスの主要なオープンスペースの単独利用者に対する調査からの居心地良さと満足度、その他の感覚との関係を分析し、またグループで利用する場合との違い等について分析している。

4 章「アプローチ空間における多様な主体との協働による整備プロセス」では、3 か所のアプローチ空間の整備が行われた大阪大学豊中キャンパスを例にとり、各計画のプロセスと主要なステークホルダーの相関を分析することで、今後の計画に資する達成要因や対話プロセスによる効果を明らかにしている。

5 章「食堂等の設置状況と利用の全体像」では、国内の 18 の大規模総合大学の食堂・売店等設置状況を調べ、うち大阪大学の学生生活調査の結果から食堂の選好状況を把握したうえで、さらに 3 大学の食堂の行動観察調査による分析を行っている。

る。

6 章「食堂等テラス席の利用実態とよく使われるテラス席の分析」では、文献調査から 2011 年以降のテラス席の整備事例を分析したうえで、近畿圏における 3 大学のテラス席について行動観察調査の結果の数量化分析から、どのような条件にあるテラス席が好んで利用されるのかを明らかにしている。

7 章「テラス席が街路に面する程度を表す指標の検討」では、3 大学 7 カ所のテラスの写真を用いた評価グリッド法によって建築学生の意識の中の評価構造を検討したうえでテラスと街路の関係性を示すモデル FIPL (Facing Index on a Point to a Line) の提案を行い、さらに終日の行動観察調査結果を用いて、提案した FIPL 指標の有効性検討を行っている。

8 章「研究の総括」では、オープンスペースの居心地や満足度には「開けた感じ」が説明変数として採用されうること【3 章】、アプローチ空間整備については多様なステークホルダーとの対話プロセスが敷地を跨いだ空間整備に効果を発揮したこと【4 章】、国内大規模総合大学の食堂等の 1 m²あたり学生数や多様な整備手法の存在を明らかにしたこと【5 章】、テラスの開放感や自然、あるいは日陰等が快適性の要素となること【6 章】、テラスと街路の関係を示す単純な指標 (FIPL) が 14:00～16:00 の食事行動において有効性を示し得ること【7 章】、これらを各章の主な結論として示した上で、総括としてこれらのキャンパス内外をつなぐ空間ならびに建物内外をつなぐ空間の計画に資する要点を整理している。

公聴会では、キャンパスマネジメントのあり方やアプローチ空間に対する地域との関係性、さらには食堂内外の建築計画への活発な議論があり、キャンパスマネジメント実務への示唆に富んだ研究として評価された。

以上のように、本論文は近年整備が求められてきている大学キャンパスの共用空間に着目し、大阪大学キャンパスを主たるフィールドとした詳細な調査・分析を通じて、我が国の大学キャンパスの共用空間の評価と計画について有効な知見を得ており、建築計画学とくに大学キャンパスの計画に寄与するところ大である。

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。